

農学類と共催できることは、学会にとって意義深いものといえます。準備に協力してくださった福島大学の関係者や後援団体の皆様に感謝申し上げます。

私事で恐縮ですが、東北地方との関わりについて紹介します。2006～2010年まで、岩手大学農学部で教員をしておりました。現在の職場に移ってまもなく、東日本大震災が発生しました。2011年5月から、気仙沼市や陸前高田市などで、被災物のなかから文化財を拾い上げるレスキュー事業に参加し、少しずつですが、岩手や宮城の沿岸部では日常の生活を取り戻す様子もみえてきました。しかし、入りたくてもレスキュー事業として入れない場所がありました。それが福島県でした。第一原発から放出された放射性物質の濃度が高く、当時は50歳以上でないと福島県の博物館・資料館でレスキュー調査に参加できなかったからです。その後、2016年からは、本日講演予定の木村さんから助言をいただきながら、相双地域に帰還して一次産業に従事する方々からお話を伺いました。風評被害などでもがき苦しみながらも、代々守ってきた場所で、一次産業を通じて再興を目指す姿勢を目の当たりにしました。いずれにせよ福島の再興は始まったばかりだというのが私の認識です。実際、5万7,000人もの人々が依然避難生活を余儀なくされています(2018年9月11日現在)。

しかし首都圏などでは、東京五輪等の情報が多く流れるようになり、福島に対する関心が年々薄れてきております。福島の山村の現状を把握し、再興のあり方について議論することは、震災関連死を含めた2万人を優に超える死者行方不明者の方々や、これから生まれてくる人々に対する責務だと考えます。

本日は、お三方の貴重な発表と、パネルディスカッションが予定されております。ぜひお聞きください。

趣旨説明

早尻 正宏 (林業経済学会広報渉外担当主事、北海学園大学経済学部准教授)

本日のご来場、誠にありがとうございます。本シンポジウムの主催者の一つ、林業経済学会の広報渉外を担当する北海学園大学の早尻正宏です。北海道札幌市の在住ですが、前任地の山形県で東日本大震災に遭って以来、この福島の地で調査研究を進めてきたご縁もあり、このたび座長を務めることとなりました。

個別報告に入る前にお時間を少し頂戴して、簡単ではございますが、本シンポジウムの趣旨について説明します。ここでは、本シンポジウムのタイトルにある「森林利用」および「森林文化」という二つのキーワードに解説を加えた上で、各報告者にどのような視点で話題提供いただくのかを紹介し、個別の報告、そしてパネルディスカッションにつなげて参りたいと思います。

まず、「森林利用」についてです。私たちは、これを「森林と人の結びつきのあり方」と捉えています。この「森林利用」ですが、生態系(気候、地形、土壌)や位置(市場との距離)、所有のあり方(土地と立木を誰がもっているか)を背景として成立する「森林環境」に対し、どのように人々が働き掛けているのかにより、その姿かたちは様々です(図参照)。

地域の人々はその時々のニーズに応じて、この「森林環境」から「針葉樹」「広葉樹」「非木材生産物」、そして「林野副産物」を採り出し、生活の糧としてきました。例えば、福島県内では、針葉樹(スギ)は製材工場の原材料として、広葉樹(クヌギ、コナラ)はシイタケ原木や製紙用チップとして、非木材生産物(山菜、キノコ、野生鳥獣)は食料と

して、副産物（落ち葉、腐葉土）は田畑の肥料として活用されてきました。

こうした「森林利用」の姿は、その時々や経済のあり方により目まぐるしく変わる部分と、そうではなく、比較的安定したかたちで、脈々と受け継がれる部分に分かれます。後者は、学術的には「制度」（法的、政治的側面だけでなく慣習的な側面も含む）として捉えられますが、私たちは今回、この比較的安定したかたちで、という点に着目しています。私たちの暮らしに溶け込み、長い歳月をかけて地域に根付いた「森林利用」——これが二つ目のキーワードである「森林文化」にほかなりません。

実は、「森林文化」は福島では馴染みのある言葉です。全国的にも早い段階で導入された福島県の森林環境税は、「森林文化」を守り育てることに目標の一つが置かれています。この「森林文化」が原子力災害を経ていま揺らいでいる——。これが私たちの共有する問題意識です。

また、詳しくはパネルディスカッションで議論することになるかと思いますが、「森林文化」を築くのは、いうまでもなく、「森林環境」に働き掛ける人間です。ここで注意してほしいのは、人間は単独ではなく、複数で協力して「森林環境」に働き掛けるということです。とすれば、ここでいう人間とは、同じ時間と場所を共有する住民の集まり、すなわち地域社会や地域コミュニティであると言い換えることができます。こうした人間や社会の形成に福島大学食農学類の「教育」——ここには大学の研究、社会貢献も含めた人材育成の取り組みという意味を込めておきます——が果たす役割は決して小さくありません。その意味で、2019年4月に迫った食農学類の開設は、次代の「森林文化」が立ち上がる重要な契機となりうるように思います。

いささか講義めいた内容となりましたが、ここで最後に、「森林利用」の概念図を振り返りながら、これからご報告いただく各位の内容がどのような性格をもつのか、簡単に整理しておきます。

第1報告、福島大学の金子信博氏には、私たちの議論や実践の出発点となる「森林環境」について、ご専門の森林土壌学の角度から、最新の知見を披露していただきます。続く第2報告、福島林業研究会の木村憲一郎氏には、林業経済学の視点から、「針葉樹」と「広葉樹」の利用について、歴史的な経緯に触れながら現状と課題を示していただきます。そして、第3報告、福島大学の林薫平氏には、農林経済学の視点から、「非木材生産物」と「林野副産物」に焦点を当てたご自身の実践を中心に話題を提供していただきます。

福島で生まれ育った木村氏、震災後に福島で暮らすことを選んだ金子氏と林氏、いずれもこの地で生きる地域に根差した研究者です。原子力災害という未曾有の事態に真正面から向き合い、考え抜き、行動してきた彼らの姿に、私は励まされてきました。タイトルにもありますように、「福島の森林利用と文化の再構築に向けて」真正面から向き合ってきたお三方のご報告は、皆様の心にきっと刻まれるものと信じます。

この趣旨説明が個別報告を理解する一助になれば幸いです。

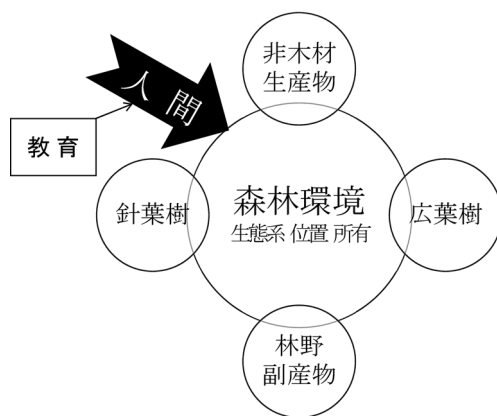


図 「森林利用」の概念図